

平成 13 年度の病害虫発生と防除

農林水産省生産局植物防疫課

I 夏期間の気象経過の概要と水稻の作柄

1 天候経過

冬期間（平成 12 年 12 月～2 月）は、北日本を中心に冬型の気圧配置が現れ、北海道や東北北部では寒気が入りやすく、寒気にすっぽり覆われ気温の低い状況が続いた。一方、西日本や南西諸島では、南の高気圧の勢力が強かったことから、冬型の気圧配置が続かず、気温の高い日が多く暖冬傾向であった。

春期間（3 月～5 月）は、3 月に、上旬の寒気、中旬に暖気、下旬には寒気と、寒暖が交互に現れ気温変動が大きかったが、4 月以降、高気圧に覆われることが多く、南西諸島と北海道の一部で平均気温が平年を下回った他は、全国的に平年を上回った。また、降水量が全国的に平年を下回り、一部の地域では農作物等への影響が見られた。

梅雨入りは、5 月 6 日頃に平年並みに梅雨入りした沖縄・奄美を皮切りに、10 日～2 週間早く 5 月 21 日頃に九州・四国地方が梅雨入りし、6 月 6 日頃には中国地方から東北地方まで一気に梅雨入りし、北陸・東北では 5 日前後早くなった。

梅雨時期は、6 月中旬頃に梅雨前線の活動が活発となり、広い範囲でまとまった降水があった。7 月以降は、西日本の各地で 7 月上旬から中旬にかけて前線の影響を受けた以外は、前線が日本海側から東北北部・北海道付近に停滞する日が多く、前線の活動は不活発となり、近畿地方での降水量は平年の 60% 程度となった。梅雨明けは、沖縄・奄美が平年より早く 6 月下旬に、九州北部及び西日本でほぼ平年並みの 7 月 19 日頃となった。東日本では平年より 20 日ほど早い 7 月 1 日～2 日頃に梅雨明けした。東北では、太平洋高気圧の勢力が 7 月上旬頃は弱かったが、中旬からは太平洋高気圧の勢力が強まり、梅雨前線を北へ押し上げたため、ほぼ平年並みに明けた。

夏期間（6 月～8 月）は、太平洋高気圧の勢力が強くなり、北日本を除く広い地域で高温で、晴れの日が多く、西日

本から東日本にかけて少雨状況、南西諸島では 8 月中旬まで高温傾向が続いた。一方、北日本では、7 月下旬からオホーツク海高気圧が発達し、曇天が続き低温となるなど 8 月中旬まで気温の変動が激しく、北海道・東北北部では低温に関する注意報が発令された。

9 月に入ると、移動性高気圧に覆われた北日本では晴れの日が多く、前線が停滞した東・西日本では曇りや雨の日が続く、九州、四国では大雨となった。中旬には前線が北上し北日本では曇りや雨の日が多くなった。なお、台風 15 号の日本列島への接近により東・西日本では降雨が続き、11～12 日には関東地方に上陸・北上し、東・北日本を中心に暴風雨となった。これにより、一部の地域では、野菜、水稻、豆類に、浸・冠水が見られ腐敗等の農業被害が生じた。

2 水稻の作柄

10 月 15 日現在、本年産の水稻の作付面積は約 170 万 ha で、前年に比べ 6 万 3 千 ha（4%）減少した。10 ㎡当たりの収量は、全国平均で 532 kg が見込まれる。予想収穫量は前年差に比べ 43 万 t 減少の 904 万 7 千 t、作況指数は全国平均で 103 の「やや良」となっている。

地域別に見ると、北海道、東北については、太平洋側の地域で 7 月上旬から 8 月中旬までの低温・日照不足により登熟が緩慢となったため、それぞれ作況指数は 100「平年並み」、102「やや良」であった。その他の地域では、7 月以降の天候による障害は概ね少なかったことから、北陸、中国及び九州は 104「やや良」、関東・東山、東海及び近畿が 103「やや良」、四国が 102 の「やや良」であった。

II 病害虫発生の概要

1 水稻

春先は、寒気の吹き込みや、好天による気温上昇などの影響で気温の変動が激しく、また、晴天続きで降水量が少なくなるなど農作業の遅れが懸念されたが、さほど大きな問題とならず、生育は順調に推移した。

梅雨入後も全国的に好天が続いたことから、葉いもちの発生は全体的に少なく推移したが、6 月第 2 週に入り、日本付近に前線が停滞し、全国的に曇りや雨の日が多くなり、中旬には北日本を中心に寒気が入ったことから、北海道及び東北において、葉いもちの発生が見られ